

語り手の発話を促進させる 聞き手反応の特徴の検討

傳研究室 17L1064M 日下晶絵

1. はじめに

順番交替のある会話の場面だけでなく、一見活動が一方的に思えるような「語り」の場面においても、語り手だけでなく聞き手にも積極的な役割を担うことが求められる。本研究では「語り」を「同一の語り手が過去の出来事に限らずに一定期間同じ内容またはそれに関連する内容について述べている」と定義し、そのような語りの場面での聞き手反応について分析し、語りの促進に効果的な聞き手反応を検討した。

2. 分析 1

2.1. 目的

語りの促進に効果的な聞き手の反応を調べるためには、まず聞き手の反応について把握する必要がある。実際に語りが行われている場面でどのような反応がどのくらい用いられるのかを確認することに加えて、聞き手の反応にどのような特徴があるのかを確かめることを目的とする。

2.2. 方法

データ： 千葉大学 3 人会話コーパスの 12 収録データのうち、ある 1 人の語り手が自発的に語りを行っているのが見受けられた 11 データを対象にした。

手続き： ELAN を用いて、まず、データごとに全会話から複数ある語り部分を抜き出し「S1」や「S2」のようにラベリングをした。次に、反応タイプとして、堀口（1988）と串田（2009）を参考にし、語りに対する 2 人の聞き手の反応を聞き手ごとにアノテーションした（アノテーションした項目は「理解」「同意」「否定」「感情表出」「先取り」「確認」「継続支持」「継続催促」「継続試行」「質問」の 10 個）。そして、聞き手の反応が語りのどのような位置の時になされるのか確認するため、位置タイプとして、Labov(1972)を参考にし、聞き手の反応が生じた際の語りの位置をアノテーションした（アノテーションした項目は「導入-途中」「導入-完了可能」「方向付け-途中」「方向付け-完了可能」「詳説-途中」「詳説-完了可能」「評価-途中」「評価-完了可能」の 8 個）。アノテーションをしたデータを統計ソフト R にて集計し、聞き手の平均反応回数を求めた。

2.3. 結果と考察

データを集計する際、反応タイプの一つである「継続支持」においては、語り中を通して反応回数が著しく多くみられたため分析対象から外し、それ以外の反応タイプを対象とした。まず位置タイプごとの聞き手の平均反応回数を求めた結果（図 1）、「方向付け-途中」の位置において最も反応が生じやすく、「導入-途中」「導入-完了可能」「評価-途中」の位置で

は著しく反応が生じにくいことがわかった。「方向付け」という要素が他の要素に比べ情報量が多い要素であり、反対に「導入」「評価-途中」は情報量が少ない要素であるためだと考えられる。もしくは、情報量の違いではなく、その要素が語られる長さによって反応機会に違いがある可能性もある。また、「方向付け」を除いて「途中」よりも「完了可能」の時のほうが、平均反応回数が多かった。「完了可能」は語りの区切りがよく反応機会が生じやすいと考えられる。

次に反応タイプごとの聞き手の平均反応回数を求めた結果(図2)、「理解」を示す反応が著しく多く生じ、「確認」「継続催促」「先取り」「否定」を示す反応はほとんど生じなかった。「理解」は語りのどの位置においても使用しやすく、「確認」「継続催促」「先取り」「否定」は反応機会が少ないといえる。

そして、位置タイプごとにどの反応タイプがどれくらい使用されているのかその割合を求めた結果(図3)、ほとんどの位置タイプで「理解」が最も多い割合を占めているが、「評価-途中」では「同意」が「理解」よりも多くの割合を占めた。「評価-途中」は平均反応回数が少ないうえに共感を示しやすい要素であるため「理解」を上回ったと考えられる。また、「導入」の要素では生じた反応タイプの種類が比較的少なかった。「導入」は基本的に語りの最初に置かれる要素であるため、生じやすい反応タイプがある程度限られてしまうのだろう。

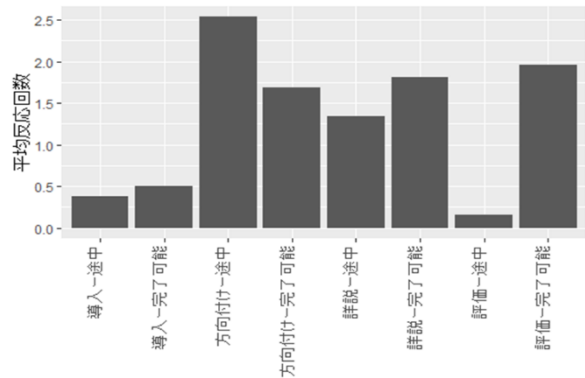


図1 位置タイプごとの聞き手の平均反応回数

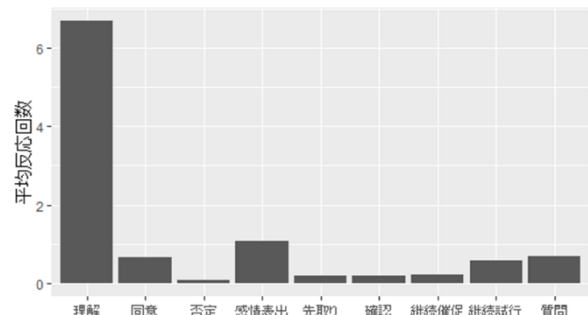


図2 反応タイプごとの聞き手の平均反応回数

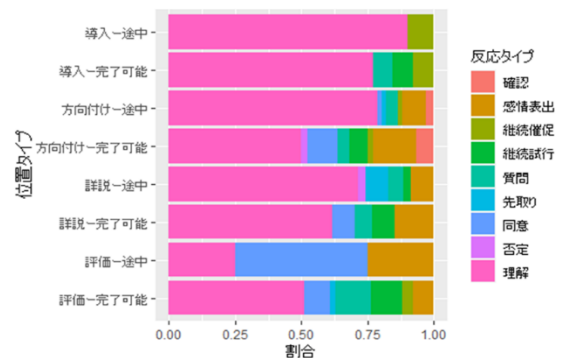


図3 位置タイプごとの反応タイプの割合

3. 分析 2

3.1. 目的

分析1の結果において、語りの要素の長さにより聞き手の平均反応回数に影響があると考えられるため、語りの要素の長さを考慮したうえで再集計し、どのようなタイミングで、どのような聞き手反応が生じやすいのかを調べた。また、反応タイプを機能の観点からまとめ、分析1では言語的な聞き手反応しか対象にしていなかったが、非言語的な聞き手反応である「笑い」を新たに追加し、集計を行った。

3.2. 方法

データ：分析1と同様のデータを用いた。

手続き：ELAN を用いてデータに「構造」の注釈層を追加し、「導入」「方向付け」「詳説」「評価」を語りの内容に沿って要素ごとにアノテーションした。また、「反応タイプ」の「同意」「否定」を「意思表示」、「継続催促」「継続試行」を「継続支持」に対して「継続促し」とし、「先取り」「確認」を「その他」としてまとめ、新たに「笑い」をアノテーションした。統計ソフト R での集計の際に聞き手反応の回数を要素の時間で割り、1 分間あたりの聞き手の平均反応回数を求めた。

3.3. 結果と考察

位置タイプごとの聞き手の 1 分間あたりの平均反応回数を求めた結果（図 4）、「評価-完了可能」において最も多く、分析 1 のように「方向付け」に関して最も多いという結果にはならなかった。分析 1 で「方向付け」において聞き手の平均反応回数が多かったのは、情報量が多いからではなく、その要素が多く語られるために聞き手の反応機会が多かったからだと考えられる。また、位置タイプごとに生じた「笑い」の反応も含めた反応タイプの割合を求めた結果（図 5）、全体で見ると「笑い」は「理解」に次いで多く、「詳説-途中」「評価-途中」においては「理解」を上回った。「笑い」は「理解」同様どの場面においても反応しやすく、「詳説」「評価」は語りの中でもオチの部分にあたることが多いため他の要素よりも特に「笑い」が生じやすいと考えられる。

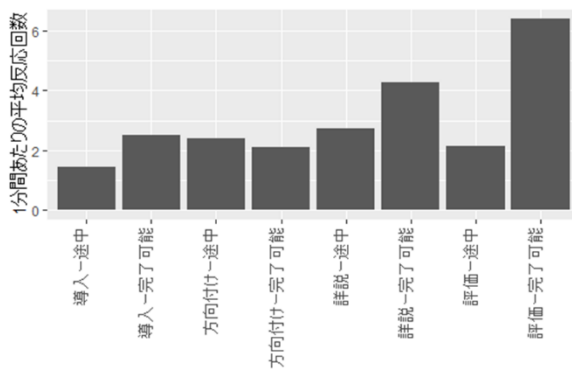


図 4 位置タイプごとの聞き手の 1 分間あたりの平均反応回数

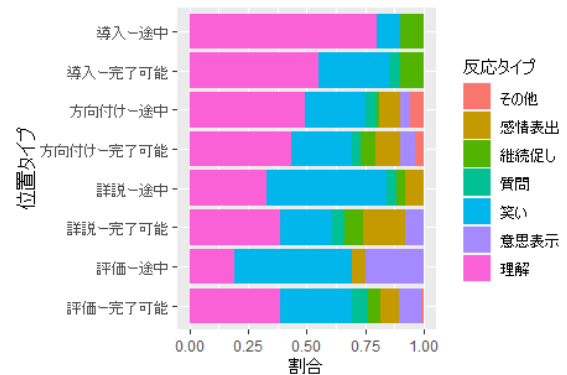


図 5 位置タイプごとに生じた反応タイプの割合

4. 分析 3

4.1. 目的

語り手の発話を引き出す反応の特徴を調べるため、「継続促し」の反応に着目し「継続促し」が見られたデータとそうでないデータを比較し、語りの長さには差があるのかを検討する。

4.2. 方法

分析 1、2 で用いた語りのデータを「継続促し」がみられた語りとみられなかった語りに分類し、「継続促し」がみられた語りにおいて同一の語り内でみられた「継続促し」の回数を求め、また、全ての語りにおいて語りの長さを求めた。統計ソフト R にて「継続促し」の回数ごとの語りの長さを箱ひげ図によって可視化した。

4.3. 結果と考察

可視化した結果（図6）、「継続促し」の回数が多くなるにつれ語りの長さは長い傾向にあるが、「継続促し」の回数が0回と1回において最小値に差がなく、語りの長さが長い位置に外れ値が見受けられた。すべての語りにおいて「継続促し」の反応があれば語りが長くなるとは一概には言えない。また、「継続促し」の反応により語りがスムーズに進んだ場合、語り全体の長さは短くなることも考えられるため、長さを指標に用いるのはあまり適切ではないと考えられる。

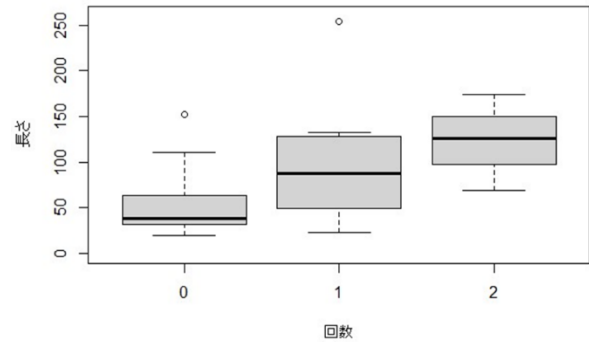


図6 「継続促し」の回数ごとの語りの長さ

5. 分析4

5.1. 目的

実際に「継続促し」が生じた時、その後の語りにどのような影響を与えているかを語り全体を通して観察し、反応が生じた後の語りの特徴を「継続促し」以外の反応が生じた後の特徴と比較しながら検討する。

5.2. 方法

語りのデータを観察し、語りの「完了可能」の位置において生じた反応とその後の語りの特徴を「継続促し」「継続支持・笑い」「その他の反応」「反応なし」の反応ごとにリストアップした（リストアップした特徴は「続き」「補足・追加」「繰り返し」「復唱」「展開」「応答」「再開」の7個）。反応の前後の語りの要素も記し集計した。

5.3. 結果と考察

どの反応が生じた後も基本的には語りの「続き」となる内容であるが、「継続促し」が生じた後の語りでは「続き」の件数は少なく「展開」の件数が多かった（表1）。「展開」は「継続促し」の他では「その他の反応」に1件みられたがそれ以外にはみられなかった。このことから、実際に「継続促し」は発話を引き出す効果があると言える。

表1 「継続促し」の反応前後の構造要素と反応後の語りの特徴

反応前	反応後	件数	特徴
導入	導入	1	続き
	方向付け	1	展開
	詳説	1	展開
方向	方向付け	1	再開
	評価	1	続き
詳説	方向付け	1	補足・追加
	詳説	1	復唱
	評価	5	続き(1)、展開(3)、補足・追加(1)
評価	評価	4	展開(1)、補足・追加(1)、繰り返し(2)

6. 総合考察

分析全体を通して、聞き手は「評価ー完了可能」の位置で最も反応回数が多く、「理解」「笑い」の反応を多く示すことがわかった。また、「継続促し」の反応が生じるとそれ以外の反応に比べ語りの「展開」の特徴が多くみられることもわかった。「継続促し」は語り手の発話を引き出すのに効果的な反応であると示唆される。今後はその適切な位置などの詳細な分析が望まれる。また、本研究では音に聞こえる反応のみを分析対象としているが、音に聞こえないような非言語的な反応も含めた検討が今後求められると考えられる。